

\*\*\* 記事 \*\*\*

例会記録

十二月例会 平成十六年十二月十八日

順天堂大学医学部九号館二階八番教室

一、地方藩医における文化活動の拡がり——土浦藩医 辻元

順の例をもとに

瀧澤 利行

一、野口英世の初期の事績について

森山 徳長

一、獣医界不世出の偉人——越智勇一先生

高橋 貢

一、史的に見る薬学成立の経過と課題 (日本薬史学会創立五十周年に当たって)

川瀬 清

一月例会 平成十七年一月二十二日

順天堂大学医学部十号館四階四〇三番教室

一、齋藤茂吉における性

岡田 靖雄

一、「山崎佐の錦小路文書」の顛末

樫田 義彦

例会抄録

石原保秀・東亜医学協会旧蔵古医書 (日漢研本) の概要

小曾戸洋・天野陽介

野澤隆幸・小林健二

石原保秀 (一八七七—一九四三) 旧蔵本は東亜医学協会を経て、現在 (財) 日本漢方研究所の所有物となっているが、修理・整理・保存・利用の便から、今春、北里研究所東洋医学総合研究所に移送された。このたびその整理を終えたので概要を報告する。なお本研究は文科省科研費・特定領域研究 (2) 「江戸のモノづくり」 「江戸時代医学・本草学資料の整理と研究」の一環である。

一、石原保秀略歴

明治十年 (一八七七) 山梨県に生まれる。

長年銀行に勤務したというが、詳細不明。生来虚弱体質であったことから東洋医学の養生法に注目。導引の研究を行い、椰子油を原料とする塗布薬を作り、全身摩擦療法を開発。これを乾浴療法と名づけ、乾浴長生会を創立して会長となり、一般同志の指導を行うようになった。

昭和二年 (一九二七) 『皇漢名医・和漢薬処方』を鳳鳴堂書店

より出版。

昭和五年 (一九三〇) 『診療夜話・死生要訣』を日本医事新報社 (あるいは鳳鳴堂書店とも) より出版。

昭和六年(一九三二)『新式塗擦乾浴療法』を出版。

昭和八年(一九三三)『皇漢医学及導引の史的考察』を出版。

昭和九年(一九三四)五月、日本漢方医学会結成(『漢方と漢薬』発行元)に際し、幹事となる。

昭和十年(一九三五)頃は渋谷区羽沢町に住んでいたが、やがて桜ヶ丘に転居、ついで杉並区西荻窪に移った。

昭和十一年(一九三六)二月、偕行学苑が発足し、拓殖大学で漢方医学講習会が行われる際、医史学を担当。講習会が講座に昇格してから二年間、講師を続けた。

昭和十三年(一九三八)東亜医学協会発足に際し、理事に就任。しかしこの年の拓殖大学漢方医学講座は、健康上また老齡の故をもって辞任、竜野一雄に交代した。

昭和十五年(一九四〇)世事を引退することを決め、房州上総湊の田園に転居。これに際し、蔵書を東亜医学協会に一括譲渡した。

昭和十八年(一九四三)一月十三日没。

(以上、昭和五十八年自然社刊『東洋医学通史―漢方・針灸・導引医学の史的考察』(石原保秀著・早島正雄編)の巻頭収録、矢数道明「石原保秀先生の思い出」より編録)

## 二、石原保秀文庫の現在に至る経緯

昭和四十七年(一九七二)、東亜医学協会は新設の(財)日本漢方医学研究所に所有の石原保秀文庫を寄贈。昭和五十一年(一九七六)日本漢方医学研究所は同研究所の蔵書目録を出版した(これには石原保秀文庫以外のものも含まれるが、

目録上では区別されていない)。石原文庫の流転経緯はこの蔵書目録に付された矢数道明(同研究所常任理事)の序「財団法人日本漢方医学研究所・漢方図書目録の出版に当たって―旧東亜医学協会石原保秀文庫の再出発に想う」に尽くされているので詳細はそれを参照されたい。

当初、(財)日本漢方医学研究所は東京都中央区日本橋三―四―一〇の中將湯ビル内にあったが、のち日本橋二―二―一〇の日本橋通りビル四階に移り、蔵書も移動した。そしてまもなく(平成十一年頃)トランクルーム(テラダ)に預けられた。さらに平成十五年十月、同研究所が文京区後楽に移転するにあたり、蔵書については、古医書類は北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部に、現代洋装本類は日本漢方医学研究所附属日中友好会館クリニック(文京区後楽)に分蔵されることになった。

本年一月二十四日に北里東医研医史研にトランクルームから搬入された古医書類は、数ヶ月をかけて整理を行い、総計八七〇点、二四六五冊あることを確認。保存帙四一三点、保存袋三七〇点を新作・購入して納め、専用の書棚に配架した。子細を六月八日に日漢研に報告。その後も修理、帙の製作作業を継続中である。

これらには洋装本も含まれているが、今回の報告ではそれを除く。なお、古医書と称したが、非医書も若干含まれていることをお断りしておく。

## 三、文庫の概要

洋装本を除いた古書(線装本)は全部で八二七点、二三八三冊である。

①、漢籍(中国人著作)中国刊本 三三三点、二二九冊ある。多くは清刊本であるが、なかには明(嘉靖)刊『活人心法』、明刊『居家必備』などの古版もある。清(乾隆)刊の『医宗金鑑』六三冊は官版で、序は朱色刷、しかも曲直瀬家「養安院蔵書」の印がある。康熙刊の『張氏医通』一五冊も比較的めずらしい。

②、漢籍日本刊本(和刻本) 一五六点、六三一冊ある。古活字版はないが、十七世紀から十九世紀までの江戸く明治初との和刻本がよく揃っている。

③、漢籍日本写本 四点、五冊ある。

④、国書日本刊本 これが最も多く、五〇八点、一三七六冊ある。欧米人原著で日本人訳の蘭方書も比較的多く、『解体新書』初版も蔵している。十七世紀く十九世紀までほぼ片寄りがない。

⑤、国書日本写本 一二三点、一四九冊ある。

⑥、その他 三点、三冊。仏書ほか。

石原保秀文庫はその専門からして養生関係が充実しているものの、古方・後世方、また医経、本草、鍼灸、蘭方、婦人、小児、老人、救急、診断、その他の分野が多く揃っている。漢方家としては有数のコレクションといえるであろう。

(平成十六年十一月例会)

## 野口英世の初期の事績について

森山 徳長

本稿は野口の少年時代、高山歯科医学院とのかかわりの時代、順天堂医院助手、伝染病研究所技手補、横浜海港検疫医官補、中国での国際防疫団員、東京歯科医学院講師の各時代すなわち渡米前の野口清作―英世の業績に的をしぼって報告するものである。

### (一) 少年時代

父佐与助は大酒飲みのみが印象づけられているが手技に秀で勤勉・努力型の人物であり、母シカも忍耐強い働き者であり、野口は両親の強い努力家の素質を持って勉勵し成功を勝ち得たのである。尋常小学校では「手ん棒」と罵声を浴びながらも主席を通し、第一の恩人小林栄先生の公私共々の教導で高等小学校を卒業した。この間渡部鼎ドクトルに第一回の手術を受け、医学の道を志して渡部医院の薬局生となり、医術開業試験に備えた(第二の恩人)。

### (二) 血脇守之助の援助(第三の恩人)

明治二九年九月上京し前期試験に合格したが無一文となつた野口は、血脇に頼み込んで高山歯科医学院の学僕となり、歯科医学叢談の編集を手伝った。三〇年五月からは血脇の特別な計らいで、濟世学舎に学び十月には後期試験に合格、晴れて医師の資格を得て、学院の病理学講師に任ぜられ、また順天堂医院に就職。図書編集係の業務を兼務した。